

収書の考え方と方法

田 伏 薫

(星ヶ丘厚生年金病院 神経科部長 医学資料室長)

病院図書室の多くは予算上、スペース上の制約を受けるので、その中で利用者要求を満し、かつ上質で広範な情報提供が可能な蔵書を作り出すのは大変難しいことである。病院の図書委員会が収書に関連してどのような役割を果たすのかを考えてみると、第1に収書方針を決めること、第2にその方針に従って実際の選書をする、第3に調査などを行って利用者の意見を収書に反映させること、第4には病院の図書室のあり方について考えて、それを病院に提言すること、等であろう。図書委員会で収書方針を考える時にいつも迷う点がある。それは収書に当って、一つは基本的なものをバランスよく揃えていくべきだという考え方と、もう一つは小さな病院図書室であるから利用者要求を第一に考えて、蔵書構成にはあまりこだわらなくてもよかろうという二つの考え方のいずれを採るかということである。私は病院図書室の収書方針に関しては、究極のところそこにいくと思っている。もちろん、そのどちらか一方のみが正しいということではなく、その二つの考え方をいかにバランス良く調和させて病院図書室として有効な収書をすべきであるかということが図書委員会の最も重要な課題であろう。今回は、私どもの病院における実例と近畿病院図書室協議会(病図協)が最近行った病院図書室の実態調査の資料を参考にしながら、収書の考え方と方法について私見を述べる。

最初に私の勤務している病院の図書室を紹介する。星ヶ丘厚生年金病院は病床数644床の総合病院で、図書室の面積は110m²で

ある。蔵書数は6,100冊で、そのうち2,000冊が単行書、4,000冊が製本雑誌である。年間受入図書冊数は約100冊、受入逐次刊行物は洋雑誌113種、和雑誌95種で、雑誌中心の収書になっている。予算は年間約581万円ではほとんどが逐次刊行物の費用である。

図書室は医務局に所属している。各診療科やリハビリテーション部、薬剤部などと平行して医学資料室という部署があり、これは病歴室と図書室、写真室とから成っている。図書室には経験豊かな専任の司書が1名勤務している。図書委員会は医師2名、司書1名の計3名で、非常に小人数である。私は図書主任と医学資料室長という辞令をもらっているが図書主任が図書委員長の役割も兼ねている。

私の病院の収書方針は十数年前に、つまり病院が発足した時にできたものであるが、資料を中央化すること、臨床を中心にする、教科書などの基本的なものを揃えること、などとなっていた。しかし、その後徐々に蔵書が整って状況が変わってきたので、必ずしもこの方針にとらわれず、フレキシブルに収書している。

実際の収書の方法は、年1回図書室で購入を希望する単行書、雑誌をそれぞれ別に募集する。各科、各部門ではこれら購入希望図書をまとめて優先順位をつけて図書室に提出する。こうして出された各科の希望リストを図書委員会が検討し、取捨選択して病院全体としての購入リストの案を作成する。その際、図書の予算として特に決まっていなくても、前年度の購入額に少し上乗した額が総額にな

るように図書委員会でコントロールして、それを経理課長に提出する。事務局長や院長が決裁しているが、今までの例では図書委員会が提出したものがそのまま通ってきている。実際のところは、雑誌をこれ以上増やす余地はないので、雑誌募集の時は交換（新しいものとの差しかえ）の希望があるかどうかを聞いたり、あるいは新設または拡張された科があればその科を優先したりしている。希望図書が少なかった時には、これはある意味ではいい機会であるので、図書委員会が独自の判断で、日頃揃えなかったものや足りなかったもの、例えば辞書類などを入れるようにしている。

次に近畿病図協のアンケート調査から収書に関連したところを引用させていただく。表1は図書委員会の審議事項にどのようなものがあるかというアンケートの回答であるが、一番多いのはやはり選書で86%の図書委員会がこれを行なっている。次いで収書方針を審議することが62%にのぼっており、選書や収書に関する仕事が図書委員会の仕事の中心になっている。

収書方針は具体的にどのようなものかという

表1

図書委員会の審議事項	
a. 予算案の作成	28
b. 設備・施設	28
c. 人員の補充・変更	6
d. 収書方針	31
e. 選書	43
f. 寄贈書の取扱い	10
g. 資料の保存期間	18
h. 製本種別	5
i. 廃棄基準	14
j. 図書利用規約	28
k. 図書室業務について	25
l. 図書室活動の評価	9
m. その他	

表2

収書方針（具体的に）

BasicなText book中心に収集	10
臨床的なもの中心に "	14
逐次刊行物を重視 "	4
個人で買えない高価なもの "	6
（安価なものは避けるを含む）	
利用度を中心 "	3
蔵書構成上片寄りのないこと "	3
（均等収集を含む）	
各科雑誌 5種	1
各科全集 1種	1
病院の診療の特色を生かして収集	5
（単科病院も含む。老人病， 精神科，東洋医学，etc）	
全集，シリーズもの中心に収集	2
" は収集しない	2
個人的な好みの強いものは避ける	1
希望図書を最重視する	4

ブックや臨床的なものを中心に図書の収集をしているところが多い。選択のポイントとしては利用度、利用者要求、蔵書構成などが挙げられている（表3）。

選択のためのツールには現物（見計い図書）、出版物目録、新刊案内などが多く用いられる。その他に Core Journal, Core Book のリストを選択の資料にしているところもあるが、これは私どもの病院では大いに参考にしている。Core Collection のリストには Brandon のリストなどいくつかのものが知られている。和書のリストは今まで適当なものがなかったが、最近近畿病図協が「病院図書室マニュアルー医学資料の整理と利用」という本を出版され、巻末に付録として「医学基本図書目録」を作成し掲載しておられるので参考になると思う。ただ、一般の病院でこれだけのものを一通り揃えるのは大変である。実際には、私の使い方としては自分自身がこのリストを見て個人で購入するか、私の科がこれを参考に揃えるとか、そういう形でも

表3

選択のポイント(複数記入)	
単行書	
1. 利用度	18
2. 利用者要求	17
(各科の希望順位も含む)	
3. 蔵書構成	12
4. 価格	8
5. 著作事項	2
6. 各科の予算内購入	2
7. 各科均等に	1
8. 改版されたもの	1
9. 統計類のみ購入	1
10. 研修生の希望図書中心	1
雑誌	
1. 利用度	24
2. 利用者要求(必要性)	15
3. 各科平等に	8
4. 価格	5
5. 主題別構成	4
6. 誌数をふやさないこと	2
7. 新しい分野に寛容	1
8. 医局会で討議決定を重視	1
9. 各科部長の意見重視	1
10. 研修生の希望重視	1

利用している。

次に私の病院の収書を検討してみると、病院図書室の大半で受け入れられている洋雑誌和雑誌は大体入っているが、特徴的な点もみられる。表4はリハビリテーション、神経病学、精神医学の分野にしぼって、私の病院で購入している洋雑誌を近畿病図協加盟の44病院と比較したものである。例えば Am.J.Occup Ther が 4/44 というのは44病院中私の病院を含めて4病院がこの雑誌を持っていることを示している。1/44 というのは、この雑誌が私の病院にしかないという意味である。私

表4 リハビリ・神経領域購入誌

Am J Occup Ther	4/44
Am J Phys Med	4/44
Am J Psychiat	10/44
Am J Psychol	1/44
Ann Neurol	5/44
Ann Rheum Dis	6/44
Arch Gen Psychiat	11/44
Arch Neurol	15/44
Arch Phys Med Rehabil	6/44
Arthritis Rheum	8/44
ASHA	1/44
Brain	7/44
Brain Lang	1/44
Br J Med Psychol	1/44
Br J Psychiat	10/44
Br J Soc Clin Psychol	1/44
Cognition	1/44
Cortex	1/44
Dev Psychol	1/44
Geriatrics	5/44
Injury	2/44
J Clin Psychol	2/44
J Neurol Neurosurg Psychiat	8/44
J Nuerosurg	18/44
JSHD	3/44
Nervenarzt	11/44
Neurology	14/44
Neurosurgery	3/44
Paraplegia	2/44
Phys Ther	7/44
Physiotherapy, London	2/44
Rheum Rehabil	2/44
Scand J Rehabil Med	1/44
Scand J Urol Nephrol	6/44
Soc Casework	3/44
Spine	4/44
Stroke	6/44
Surg Neurol	6/44

の病院はリハビリテーションに力を入れている総合病院であるが、病院の特徴が収書によく反映されている。このように各病院が特色のある収書をするのは良いことだと思っている。

次に、病院の職員が自分の病院の図書室をどれだけ頼りにするかということについて考えてみる。私どもの病院では数年前に利用者の調査を行ったが、出身校や他機関とのつながりがあって、そこから文献入手ができるかどうかという質問に対して、医師の72%が「ハイ」と答えている。すなわち自分の病院の図書室以外にも利用できる図書室があるという者が大多数であった。ところが看護婦の場合「ハイ」19%、「イエ」81%でこの辺は医師と大分違っているので、収書の際に留意すべきであろう。

図書室で購入している雑誌と個人で購入している雑誌が重複しているものがあるのは当然であるが、その数は医師の場合 2.5 誌重複して購入しており、看護婦では 0.75 誌であった。和雑誌について私個人の例を表 5 に

表 5 病院と個人の購入誌

	病院	個人
精神神経学雑誌		○
臨床神経学	○	○
脳波と筋電図		○
失語症研究		○
日本老年医学会雑誌		○
日本医師会雑誌	○	○
JAMA (日本語版)		○
精神分析研究	○	
脳と神経	○	
神経研究の進歩	○	
精神医学	○	○
臨床精神医学	○	
神経内科	○	○
臨床脳波	○	
クリニカル・ニューロサイエンス		○
CT 研究	○	

示した。上段は学会誌で、下段はそれ以外の雑誌である。このように医師は自分の所属する学会の学会誌を自動的に所有しているので、病院で学会誌を購入すべきか否かが問題になる。個人で持っているから病院の図書室では学会誌を揃えなくともよいという考えもあれば、一方でやはり学会誌は基本的なものだから揃えておくべきだという考えも出てくる。表 5 の中で学会誌以外の主な神経領域の雑誌を病院で購入しているが、これらはいずれも

もし病院になければ個人的にでも購入したいもので、図書室があっても助かっている。

そこで病院図書室の収書の際に何が基準になるかということをもう一度整理すると、先ず第 1 に病院の方針、設置主体がどのような病院であるかが重要である。それから予算、蔵書構成、利用者の要求、利用度、スペース等も当然参考にすべきである。以上の他に病院図書室の場合は大量の蔵書を揃えることは不可能であるから、他機関の資料を如何に利用できるか、そのシステムを作ることが非常に大切である。先程私の病院の収書の特色について述べたが、各病院が得意とする領域を分担して収書し、それをみんなで利用していけばよいと考える。更に病院の場合は個人が、特に医師が自分の領域のものをかなり持っているので、図書室がそれを把握しておいて必要に応じて利用させてもらうというような工夫もすべきであろう。

最後に収書に関連して、資料の廃棄ということにも触れておかねばならない。先程の実態調査では廃棄基準を持っているところが 11 病院、基準のないところが 50 病院で、まだ深刻に考えられていないところが多いようであるが、これからは重要な問題になってくると思われる。寄贈書の取扱いについても同様で、取扱い基準のない病院が殆んどであるが、検討が必要であろう。

以上、病院図書室の収書について、星ヶ丘厚生年金病院の実情と近畿病図協の実態調査の結果を述べその中で図書委員会の現状と役割について考察した。